

---

# 永久に永遠に

卯ヶ島 名雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永久に永遠に

### 【Nコード】

N1051W

### 【作者名】

卯ヶ島 名雪

### 【あらすじ】

魔法、それは現代において存在を否定された在るはずのないモノ。

しかし、それは確かに存在する。

遠い昔から現代まで絶えることなく。

そして、一部の者はそれを使い境界を守り続けている。

現実と虚実の境界線を。

こちらの小説は、もう一つの小説のネタに詰まったときに気分転換に書いているので、本格的に書くのはそのうちって感じになりそうです。

でも、実際こちらの方が話的には書きやすいんですよ（笑）

## 終わりと始まり（前書き）

投稿は亀並みの遅さになりそうです。

## 終わりと始まり

夕暮れ時のような色合いに空が覆い尽くされた、人間が住まう世界とは似て非なる場所。

世界と瓜二つでありながら、世界から遮断されたセカイ。

終わった。

戦いは終わった。

多大な犠牲を代償に、死を体現した存在を倒すことによって。

生き残った者もいた。

しかし、

「ひっひっ、みんな死んじまった。死んじまったよ。なあ、おい、聞いてんのか。聞いてんのか!？」

「……ああ、聞いてるよ。お前も、壊れちまったんだな」

生き残った数少ない者達も大半が心を病み、壊れてしまっていた。

それだけの惨劇だったのだ。

「ひゃっ、ひゃっはは、そうだな。壊れたんだ、壊されたんだよ!

! なあ、お前は何で壊れないんだ? なあ、由樹ゆき? あはははは

はははは」

「……すまん」

壊れた者をそのままには出来ない。

普通なら専門の病院にでも入れるのだろうが、此処にいる者ではそれも難しい。

普通の者ではないからだ。

だからこそ、由樹と呼ばれた者は、いや、それ以外の正常な者達はその者達を眠りにつかせる。

永遠に目覚めることのない眠りに。

「……由樹」

由樹がぼんやりと赤く血に濡れた左手を眺めていると、残った者達が集い始めていた。

そして、悲痛の面持ちでその一人が名前を呼ぶ。

それだけで、由樹は何を言いたいか理解する。

「ああ、そうだな。繰り上げでの地位ではあるが、リーダー代理である上條かみじょう 由樹ゆきの名において、この大戦を以てチームは解散することとする。みんな、日常に戻れ」

一同に向き直った由樹は、ぼんやりとしたまま事務的に言葉を発した。

感情を込めるなど、今の状態では到底出来ることではなかったのだ。そして、この言葉を合図に無作為に集まっていた者達は数人を除いて各々、空間に出来た亀裂に姿を消していく。

「……由樹、よかったのか？ チームを解散するってことは」

「分かってる。境界線の守りが薄くなるって言いたいんだろ？」

残った者の一人の言葉を遮り、由樹は頷く。

「でも、今のチームで守りきれれると思うか？ 主戦力の大半をあの化け物に消されて、生き残った連中も廃人同然」

そうするとともに、今度は深いため息を吐きながら苦渋の決断だったことを示唆した。

「それに、このチームが無くなっても、新しく他から人員が派遣されて俺らの代わりをしてくれるさ」

由樹は苦笑いを浮かべ、肩をすくめる。

「チームが無くなるなら、由樹はこれからどうするの？」

「千紗ちさ、俺も日常に戻るよ」

千紗と呼ばれた者の不安げな表情に、由樹は悲しげな表情を浮かべるが一線から退くことを告げる。

「そんな……、由樹まで居なくなったら、本当に境界線に主戦力で呼べる人がなくなっちゃうよ」

不安が的中した千紗は、今にも泣いてしまいたい心情だった。

「今現在、ギリギリ主戦力と呼べる者も含めて数えられるのは此処にいる者と、他のチームや組織の中の各数名つてところか」

すると、残っている者の中でも一際大柄の三十過ぎに見える男性が口を開く。

「由樹、その中でも三本の指に数えられているお前が居なくなるのは、正直かなり痛い。同じ三本の指に数えられているリーダーがない今、それは」

男性のそれを繋げ、一人の青年が由樹へ諭すように現状を改めて話す。

「大和、俺もさ、人間なんだわ。いくら主戦力だ、三本の指だって言われても人間なんだよ」

しかし、それも由樹の決断の前には届かない。

由樹は疲れた表情でゆっくりと大和と呼んだ青年を見つめ返した。

「由樹……」

「すまん、許してくれ」

大和が言葉に詰まって、下を向くのと由樹が仲間に頭を下げたのは

殆ど同じタイミングだった。

そして、由樹も亀裂に入っただけ姿を消した。

沈痛な面持ちで仲間を見送る。

由樹の辛さは痛いほど分かったからだ。

特に由樹は今回の作戦では、要にされていた人物であった。

それは、かなりの重荷になったのは言うまでもないが、更に由樹はまだ十代半ばでしかない。

その年齢にこれは辛過ぎた。

いや、辛いなどという言葉では足りないほどだった。

だからこそ、由樹が亀裂に入っていくのを止める者はいなかった。

そのあと、一人二人とその場を去っていき、最後の一人が立ち去ると、残ったのは悲しみと嘆き。

それだけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1051w/>

---

永久に永遠に

2011年10月7日20時31分発行